

「高輪プリンツヒェンガルテン」オーナー指揮者

宮城 敬雄

信念と情熱が何よりも大切なのは 会社経営もオーケストラの指揮も同じ

がむしゃらに働いた四十代
何か大切なものを忘れていた

私の母はピアノ教室を開いて、たくさん生徒を教えていました。そんなわけで、私は、小さなころからクラシック音楽の美しさに魅せられて、育ちました。

小学生時代一番好きなのが音楽の授業で、たしか卒業する時の作文に「大きくなったら指揮者になりたい」と書いたことを覚えています。高校生のころには、当時のベルリン・フィルのオーボエ奏者、ロータ・コッホさんの音色に引かれ、オーボエにあこがれました。

ところが、教育玩具の会社を経営していた父から「音楽家なんて、そんな甘っちょろい夢を見るな。一流のビジネスマンになれ！」と言われて、音楽家になることは断念したのです。今、思えば、意志薄弱ですね(笑)。

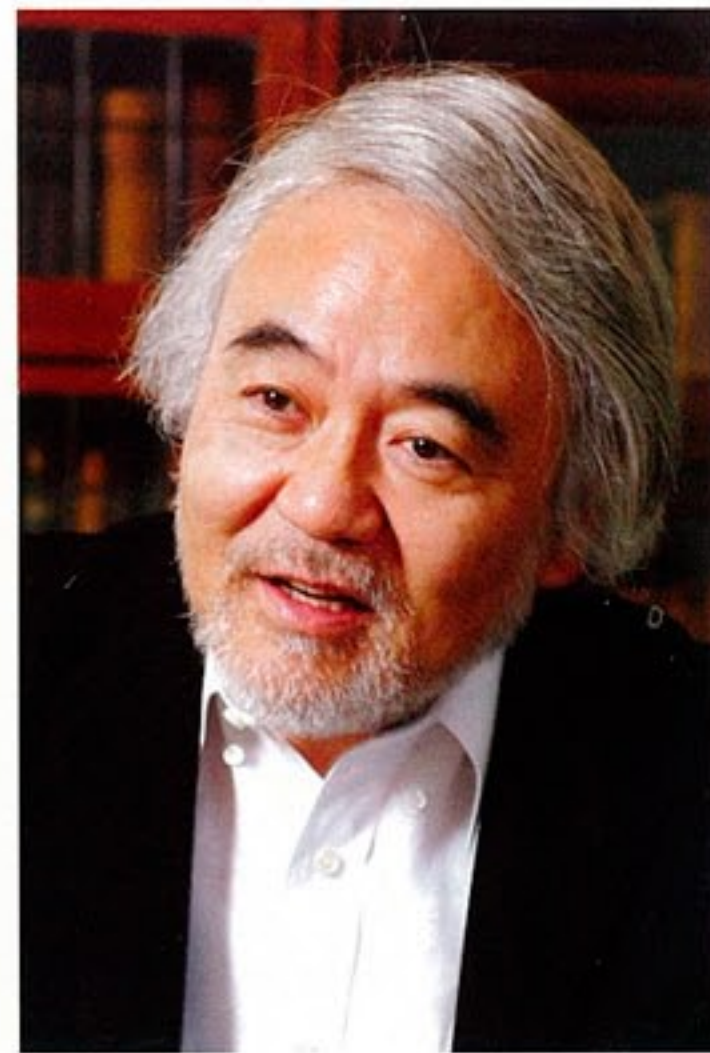
でも、音楽とかかわっていたくて、会社勤めをしながら、趣味でアマチュアのオーケストラに参加し、オー

ボエを吹いていました。そんな私に転機が訪れた……というか、転機を余儀なくされたのは、四十一歳の時です。

父が病気で倒れ、経営していた教育玩具の会社が倒産寸前の危機に見舞われました。いろいろためらいましたが、やはり、父が創業した会社をつぶすわけにはいけません。清水の舞台から飛び降りる「思いで事業を継いだわけです。ところが、すでに社員の士気は低下していて、なかなか活路を見いだせません。業績は下降線をたどるばかりで、もう毎日、死ぬ思いで夜中まで働く日々が続きました。

それで、起死回生のために新事業を立ち上げるしかない、そのヒントを得るためにヨーロッパをめぐるうちに、ドイツのローテンブルグで「これだ！」というものに出会いました。それは、一年中、クリスマス霧閉気が楽しめるという、素晴らしいクリスマス用品のお店でした。「これを、日本に紹介したい」と、その、ド

イツのクリスマスショップを再現した店舗を日本でオープンしてみました。そりゃあ、一年中クリスマスなんて、ビジネスとして成り立つのか不安はありました。しかし、このクリスマスショップ「プリンツヒェンガルテン」は徐々に評判となりました。また、日本初のハウスウェディング(庭つきの邸宅などを貸し切って行う結婚式の事業もスタートさせ、この十五年で三千組のカップルが、私どもの店で新しい人生の船出をしています。そんなわけで、四十代は、がむし



みやぎ けいお
1944年、大阪生まれ。一橋大学商学部卒業。イギリス・キングストン・カレッジ大学院でマーケティングを専攻。大手企業でのサラリーマン生活を経た後、父の創業した教育玩具の会社を継ぐ。91年、高輪プリンツヒェンガルテン設立。そこで、クリスマスショップ、レストラン、ブライダルの3事業を展開する。50歳から指揮を学び、2000年にはスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団を指揮、ヨーロッパでのデビューを果たし、高い評価を得る。その後、ハンガリー放送器、サンクトペテルブルグ響、チェコナショナル響、東フィル等、国内外の指揮をし、特にブラームスの演奏が注目を浴びている。

やらに働いて、会社経営はやっとな軌道に乗ったのですが、この間、オーボエも四十五歳でできなくなり、大好きな音楽から、まるで遠ざかってしまったわけですね。たった一度しかない人生で何かとても大切なものを忘れてしまった、そんな自分がある日、はたと気づいたんですよ。

五十歳のときに初歩から指揮者の勉強を開始

それで、少年時代からの「いつか指揮者になって、自分の思いを表現してみたい」という夢がふつふつとわいてきました。

でも、その時、私はもう五十歳になっていました。当然、「今さらそんなとてつもない夢をかなえられるはずがない」と思いました。しかし、この夢を実現しようとするのなら、体力も知力・気力も残っている今しかない——そう考えると決心がつき、プロの指揮者である白川和治氏に



2002年6月、ウィーン楽友協会ホールでのスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団、パウル・パドゥラ・スコダ氏と共演した宮城さん

指導をお願いし、その後、クルト・レール氏、汐澤安彦氏、上杉隆治氏、田久保祐一氏、湯浅勇二氏らに師事したわけです。音楽大学も出ていない私が、それも五十歳で指揮者になりたいというわけですから、最初は「えっ!? いくらなんでも遅すぎると、あきれ返られました(笑)。

そうやって、指揮者として初歩から勉強を始めました。会社経営の傍ら、時間をくりながらです。そして、その翌年の一九九六年には、自分のオーケストラである「プリンツヒェンガルテンフィルハーモニック管弦楽団」を結成することができました。このオーケストラの練習で初めてタクトを振った時は、「もうこれで夢がかなった」と、天にも昇る気持ちでした。そして、「コンサートはいつやるのか?」というメンバーたちからの声がかまびすしくなると、「今後は、定期演奏会を毎年開こう」ということになってしまいました、もう、こちらがびびり(笑)。

そのうち、一緒に演奏したオーボエ奏者の渡辺克也さんから「ヨーロッパのオーケストラを指揮すれば、もっと自分の音楽に近づけると思うよ」と、言われたんですよ。

「そんな夢のようなこと、できるはずがない」と思ったのですが、渡辺さんはベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団の首席オーボエ奏者ですから、ヨーロッパで影響力があるんですね。そんな彼の推薦で、あれよ、あれよという間に話が進んで、スロヴァキ

アンフィルハーモニー管弦楽団を指揮することにいったん決まりました。もう、どうにも信じられなくて、夢を見ているんだと思いました(笑)。

初演は二〇〇〇年の六月のことでした。それは緊張しましたよ。無名もいところの自分が、ヨーロッパを代表するオーケストラを指揮するわけですから。曲目は、ブラームスの『交響楽第二番』でした。演奏が終わって楽団員から、「あなたを歓迎する。共感できて、素晴らしい演奏ができた」と言われ、もう胸の中がじんと熱くなるほど感激しました。

音楽のある人生は心が潤い素晴らしいもの

そんなわけで、どこかで音楽とかかわっていたいという夢は、かなえられました。ミュンヘン交響楽団やザグレブ・フィル、それに音楽の聖地・ウィーンでタクトを振る榮譽にも恵まれ、これまでに三十一回も、国内外のオーケストラを指揮してきました。もちろん、会社経営のほうも、おろそかにしてはおりません(笑)。

「タクトを振るのは、もうやめようかな」と思ったことは、何度もありますよ。指揮者としての才能のなさや技術的な未熟さを繰り返し痛感させられたからです。けれど、その度に「これは、自分で追い求めてきた夢なんだ」と心を奮い立たせ、乗り越えようとしています。

指揮者の醍醐味は、自分の好きな音楽を自分のイメージ、自分の思いを込めて、いかに熱く演奏させるかにあると思います。そのためには、オーケストラを一つに束ねなければなりません。楽団員一人一人の個性を生かしつつ、全体を一つの方向に持っていくためには、楽団員とのコミュニケーションを深めて音楽を一緒に楽しむこと、そして信念と情熱を持つことが、指揮者には何よりも必要とされます。

そういう意味では、オーケストラを指揮することは、会社を経営することと同じではないかと。だから、会社経営者としての経験がオーケストラの指揮にも役立つのか、かなと思うのですが、こう言うと、「厚かましい」と言われそうですね(笑)。

五十歳で夢の実現に向かっている挑戦を始めた私が、ここまで来ることができたのは、幸運の女神が応援してくれたからのような気がしてなりません。そんな私の、指揮者としてのさらなる夢は、大好きなベートーヴェンの交響曲全曲を指揮することです。そのためには、体力づくりもしなければ。

最近、五十代になってから音楽を始める人たちが増えているそうで、とてもいい傾向だと思います。やはり、音楽のある人生は、自然と心が潤い、素晴らしいものです。私も、情熱の続く限り、わが道を歩み続けたいと思っています。